

# トマス・ヒューズ『トム・ブラウンの学校生活』再読

大井靖夫

## はじめに

学校物語という文学ジャンルと学校物語産業という社会現象が明らかに存在しているにもかかわらず、なぜかイギリス文学史上ほとんど認知されていないようである<sup>1)</sup>。理由はいくつか考えられるが、その一つが例の抜き難い二元的文化論であることは確実である。超歴史的な「真の」文化と「低級な」大衆文化という分け方のことである。そのことの是非を今は問題にしない。ただ、反論の一例として、すでにスーザン・ソントグが「一つの文化と新しい感性」(1967)というエッセーのなかで、上記の二元的文化論を「最もみごとに表現した」のがマシュー・アーノルドだと言い、この「マシュー・アーノルド流の文化観」の破産を指摘していることだけは言っておきたい。

さて、学校物語が産業として成り立つからには、その需要があることは言うまでもない。だが、学校物語の多くがエリートの登場するパブリック・スクール物語であるのに、それが大衆の読書文化を形成した事実はいかに皮肉である。この問題追求の先鞭をつけたのが、後にR.ホガートやR.ウィリアムズの大衆文化論に影響を与えたとされるジョージ・オーウェルであったことは周知の事実であろう。学校物語が論じられる際に必ず俎上に上るのが彼の「少年週刊誌」(1940)というエッセーである。そこで指摘されていることは、数ある少年週刊誌には例外なく学校物語が連載されているということ、それらの起源がトマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』やキプリングの『ストーキー・アンド・カンパニー』にあり、下層階級の上流階級好みに訴えるように脚色され、その結果は彼らを時代錯誤の夢想の世界に誘うことによって現実から目を逸らさせることになる等々である。以上の簡単な要約からも分かるとおり、やはりオーウェルも従来の二元的文化論の線に沿って週刊誌の学校物語を文化として容認していないようなのだが、「最低の本はしばしば最も重要な本である」との認識から改めて文化を問いなおすところに彼の斬新さがあったのである。

文化論はさておき、誰もが学校物語の嚆矢と認める『トム・ブラウンの学校生活』とはそもそもいかなる作品なのか。まず原点を見極めないことには、学校物語の大衆文化論もスタートできない。再読の必要を感じる所以である。

1) Rudyard Kipling, *Stalky & Co*, Oxford University Press, 1987, p. XIV.

## 1 大説『トム・ブラウンの学校生活』

オックスフォード版世界古典叢書の一冊である、トマス・ヒューズ Thomas Hughes の『トム・ブラウンの学校生活』（初版は勿論1857年であるが、このオックスフォード版は1989年が初版である。以下『トム・ブラウン』と略記する。）の編者は、ロンドン大学のアンドルー・サンダーズである。ところが、彼が書いた1994年出版の『イギリス文学史』<sup>1)</sup>における上記作品への言及は、「(トマス・アーノルド校長の)愛弟子と言うにはほど遠い」生徒の書いた「未だに人気の衰えない少年物語」、といったいかにも簡便なものである<sup>2)</sup>。それも、過去の文学史と変わりなく、トマス・アーノルドの紹介に絡む付録的存在として扱われているにすぎない。初版の出た1857年にはすでに5刷まで刷られて11,000部が売れ、1862年までには28,000部、1892年になると52刷が出て、そして上記のとおり現在もなお刊行中の作品の位置づけとしては、例外的だとは言わないまでもいささか意外である。

ところで、最近のヴィクトリア朝社会史への関心と世界的規模での教育問題の浮上とが絡むなかで、イギリスの学校事情を紹介した出版物も目立つようだが、そのうちの一冊である『パブリック・スクールの学校生活』では、著者ジョフリー・ウォルフォードは、各章頭に（6、10章は例外）『トム・ブラウン』からの一節をエピグラフの体裁で引用し、それを手掛かりにパブリック・スクールの社会学を論じている。オーウェルは前掲のエッセーのなかで、「学校物語」というジャンルはイギリス特有のものである、なぜならイギリスの教育は階級問題に他ならないからだ」と述べているが、ウォルフォードはヒューズの作品にこだわる理由を、オーウェルとほぼ似た視点から、多くのイギリス人はパブリック・スクールと直接縁がないだけに、返って『トム・ブラウン』は未だにかれらのパブリック・スクール観に大きな影響を及ぼしているからだ、と説明している<sup>3)</sup>。ウォルフォードのそれは明らかに文学史と対照的な取扱いであると言えよう。

さらに、例の Viking Portables の一冊である *The Portable Victorian Reader* (1972) の第4部「教育」の部には、17項目の抄録があり、その内の二つは、『トム・ブラウン』からの抜粋であって、複数の抄録は他にディケンズと J. H. ニューマンだけであることから判断して、このことは社会史的な注目度の高さの一つの証明だとも考えられる。

J. G. ハーディの大著『パブリック・スクールの諸相』によれば、トマス・ヒューズの『トム・ブラウン』を嚆矢とする「学校少年文学」は1870年以降大変な流行を来し、そのまま第2次大戦後まで続いたという。その流行の代表的作品の一つとして紹介されているのが H. A. Vachell のハロー校を舞台にした『丘』(1905) という作品であって、筆者の今持っているのは翌年の1906年出版の第6版（「決定版」と記されている）なのだが、面白いのは27紙にも及ぶプレス・オピニオンが本のカヴァーにではなく、わざわざ表紙の見開きページに収録されていることである。その中で2紙が『トム・ブラウン』を引き合いに推薦の辞を述べているところに、ヒューズの作品のこのジャンルでの貫禄が暗示されているように思えるのである<sup>5)</sup>。業界が異なると、かくも処遇が変わる好適例であろう。

前置きが長くなって申し訳ないのだが、もう一つこの作品に絡むエピソードに言及しておきた

い。つとに有名な A.P. スタンリーの『トーマス・アーノルド伝』が出たのはアーノルドが亡くなった2年後の1844年であるが、この本もよく売れ1881年には出版社をジョン・マレー社に変えて第12版が出ている。そのとき彼は新たに短い序文を書き、アーノルド理解のためにさらに二つの作品（‘two important additions, and two only’）が出版されたことを紹介している<sup>6)</sup>。一つが『トム・ブラウン』であり、他はマシュー・アーノルドの「ラグビー・チャペル」という詩である。ラグビー・ネットワークの身内褒めという要素も加味されてのことだったろうが、スタンリーはヒューズのアーノルド校長の描写は自分の『伝記』に比べてよりヴィヴィッドだと推奨している。アーノルド直系の神学博士であったスタンリーの推奨はヒューズにとって名誉であり、一種の御墨付きであったとも考えられる。

回りくどい言い方になってしまったが、結論的に言えば、既述のように文学史の上で無視され社会史的に注目されるという、この作品の読まれ方は、ある意味でヒューズにしてみれば目算どおりであったと言えよう。「序文は決して書かぬ」という禁を破って、彼は第6版で初めて序文を書いている。これを読むと上記の事情がよく分かる。というのは、いくつかの書評がこの作品の最大の欠点として「説教が多すぎる」（“too much preaching”）点を指摘し、次の作品での是正を求めたのに対し、彼はいかにも信念の人らしく断固これを拒否し、さらに次のように述べている。「人が私の年齢に達し、糊口をしのがねばならず、暇な時間などないときに、誰が休暇を費やして読者を楽しませるためだけのお話などを書けようか。私には考えられないことだ。少なくとも、私は断じてそんなことはやりたくない。」そして、「説教」（‘preach’）こそが彼の唯一全的な執筆目的であることを強調しているのである。要するに、彼の書きたかったのは小説ではなく大説であったのだ。

- 1) Andrew Sanders, *The Short Oxford History of English Literature*, Clarendon Press, 1994.
- 2) *Ibid.*, p. 445.
- 3) G. ウォルフォード（竹内洋・海部優子訳）『パブリック・スクールの社会学』世界思想社, 1996, p. 5. 原書のタイトルは *Life in Public Schools* である。
- 4) Jonathan Gathorne-Hardy, *The Public School Phenomenon*, 1977, Penguin, 1979, p. 230.
- 5) Horace Annesley Vachell, *The Hill*, John Murray, 1906. これはハロー校を舞台にした「友情のロマンス」を描いた作品なのだが、大変な人気だったようだ。出版月の4月に3刷, 6, 7月に各1刷, 9月に2刷, 10, 12月に各1刷。正にブームと言えよう。
- 6) Arthur Penrhyn Stanley, *The Life and Correspondence of Thomas Arnold*, John Murray, 1881, Vol. I, p. VIII.

## 2 トマス・ヒューズの経歴

『トム・ブラウン』<sup>1)</sup>は、その後の「学校物語」に比べるといかにも原型に相応しいというべきか、粗雑で型破りな作品である。作品はそれぞれ九章からなる二部構成であって、冒頭の三章まではブラウン一族の年代記を中心としたイングランド民俗史、あるいは歴史文明批評といった趣さえ感じられる。そこが、小説ではなく大説たる所以なのだが、彼の経歴を読むとこの作品の不定形さも間接的ながら一応納得できるように思われる。そこで規格化されない「自然人トム・ヒ

ューズ<sup>2)</sup>」の経歴を簡単に紹介しておきたい。

T. ヒューズは1822年にバークシャー州のアフィントンで生まれた。1834年に兄の George Hughes とともにラグビー校に入学（マシューとトマスのアーノルド兄弟のラグビー入学は1837年）。バークシャーの地主（squire）であった彼の父はオックスフォードで知り合ったトマス・アーノルドに敬服していたので、彼が校長であったラグビー校に送ったわけである。『トム・ブラウン』には、父がラグビーに向かうトムとロンドンの旅籠で別れる印象的な場面があり、父はそのとき息子のトムに「勇敢で、役に立つ、嘘をつかないイギリス人になり、紳士になり、キリスト教徒になってくれさえすれば、他に望むことはない」と言う。これはむしろ、作者のヒューズが息子（＝読者）に伝えたかった「説教」と解するべきだろう。その内容は自ずから当時の思潮を包摂していたと言える。「勇敢」さは伝統的な騎士道精神と当時流行の筋肉的キリスト教思想の反映であり、「役に立つ」云々はキリスト教の奉仕の精神とともにベンサムの功利主義を示唆し、「紳士」と「キリスト教徒」の結びつきこそトマス・アーノルドの教育理念であったクリスチャン・ジェントルマンに他ならない<sup>3)</sup>。

ヒューズのラグビーとオックスフォード時代は、トムのそれと同じく勉学に励むというよりクリケットに集中されていたようである。大学を卒業した1845年に法律の勉強のためリンカンズ・インに入り、47年に結婚、フランス2月革命の48年にはF.D. モリスの主導するキリスト教社会主義運動にC. キングズリー等とともに加わる。その後ヴィクトリア朝中期のラディカルに相応しく、弁護士業を続けるかたわら労働者への同情を深め1850年には労働者大学設立のために邁進することになる。「1850・60年代のヒューズは、キリスト者としてはより戦闘的に、社会主義者としては、より非教条的となったが、労働者への信頼はあいかわらず持ち続けた。」以上の背景とすでに紹介した「序文」からも分かるとおり、56年の夏の休暇に書き始められた『トム・ブラウン』が、キングズリーの *Alton Locke* (1850) と同様の世直しの書であったことは容易に察せられるところである。

1865年と68年の二期、組合の支持によって国会議員にも選ばれ、アメリカ南北戦争で北軍を支持した彼は、70年には初めてアメリカを訪ねJ.R. ローウェル、エマーソン、ロングフェロウ等と親交を深めるなど、大西洋を股にかけていかにも時代と並行していたかのようだが、1867年の第二次選挙法改正法案の通過は、「ヒューズが小さな役割しか果たせないような新しい世界を生み出した。都市労働者階級は完全な政治的市民権を手に入れることによって、ヒューズにより近づくのではなく、逆に彼から離れることになった。そこでヒューズも、大きな共同体から小さな共同体へと退き、海の彼方の偉大な新世界で、開拓者の共同社会を建設することに希望を託した<sup>4)</sup>」だが、テネシー州の第二の「ラグビー」共同体は「かれの楽観的な性質と人を信じすぎる性癖とが災いして」、結局は失敗に帰した。アーノルドの再来はなかったのである。帰国後の82年に州裁判所判事に任命されて平和な晩年を過ごし、亡くなったのは96年サセックス州のブライトンであった。

1) Thomas Hughes, *Tom Brown's Schooldays*, Oxford University Press, 1989. 以下の引用はこの版による。

2) Asa Briggs, *Victorian People*, 1954, Penguin, 1990, p. 175.

3) 「筋肉的キリスト教」と「クリスチャン・ジェントルマン」については村岡健次『ヴィクトリア時

代の政治と社会』、村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン、その周辺とイギリス近代』（ともにミネルヴァ書房）参照。

4) Asa Briggs, *op. cit.*, p. 173.

### 3 『トム・ブラウン』における、トマス・アーノルド

「文学的名声の政治学」という言葉は何とも現代的であるが、要するに批評史あるいは受容史のことである。トマス・アーノルドにもスタンリーからヒューズ、S. スマイルズ、そしてL. ストレイチ、T. W. バンフォードと繋いでいけば、批評の「政治学」が成立するわけだが、今はヒューズの受容に焦点をしばって彼のアーノルド像を確認しておきたい。<sup>1)</sup>

『トム・ブラウン』第1部6章において漸くアーノルド校長が登場する。しかし、主人公のトムは入学早々未だ校長を直接見る機会はなく、以下の引用は先輩たちからの情報あるいは噂にすぎない。

生徒たちは断固として自分の主義を押し通す強力な人間が彼らを支配していることを感じた。しかし、その人が賢明で愛情深い人でもあることには、まだ気づいていなかった。彼の個性と感化力についても、就任後まだ日が浅いということもあって、彼と直接に接触のあるごく一部の上級生を除けば誰も知らずにいた。だから、膝下の校長寮の大多数の生徒にさえ、非常な恐怖と嫌悪の目で見られていたのである。というのも、彼が赴任したときの学内の荒廃は凄まじく、とても放置しておける状態になかったので、不評を買ってでも凄腕を揮って秩序と規律を回復する必要があったのである。

詳細を抜きにして言えば、「用心深く、敬虔な」(‘careful and pious’) 親たちからは敬遠され、騒乱時には軍隊の出動まで仰いだ、従来の多くのパブリック・スクールの野蛮とも言える無規律を抑え込み初めて近代的な学校の体裁を整えたのが、アーノルド校長であったことは、アーノルド神話云々は別にして今では定説であると言ってよからう。<sup>2)</sup> アーノルドの校長就任6年目の現状の一端が上記の引用文から窺える。とりわけ過去のプリフェクト・ファギング制度 (prefect-fagging system) (システムというより、上級生の下級生に対する野放しのいじめ) をアーノルド流に改変した結果、大多数の生徒には「恐怖と嫌悪」の目で見られ、上級学年の監督生 (prefect) にしか彼の教育理念が理解されていなかったらしいことは重要である。サンダーズも指摘するように、見方によれば彼は「暴君」であったのかもしれない、なるほど「1789年のスピリット」に彩られた「信義と自立と民主主義」の進歩思想を生徒の間に浸透させたかもしれないが、どうじにその独自のシステムの必然的結果として「ご機嫌取りやスパイ」を生み出したことも否めない事実であった。しかし、アーノルド弁護ということではなく、それが所謂現場の論理というものであり、「統治」の宿命と言えないこともない。

後に個人的に生徒に語ったところによれば、彼は若いときから大変な野心の持ち主であったようだ。具体的に三つの大きな野望、すなわちイギリスの首相になるか、インド帝国の総督になる

か、あるいは世界的な文豪になるかのいずれかであった。<sup>3)</sup>特にインドへの憧憬は強かったらしく、友人の息子のインド勤務を祝す手紙のなかで、「インドは青年の野望の対象としては最高のものでしょう、少なくとも私にとってはそうでした。だからこそご存じのように、かつて私はその夢の実現のために努力もしたのです。」羨望に耐えないといった文面である。大英インド帝国という大きな共同体の夢は消えたとはいえ、ラグビー校校長ともなれば高位の‘governor’であり、そこに「統治」の介在しないはずのなかったことは上記の引用文からも明らかである。いずれにしてもイートン、ハロー、ウィンチェスター等の老舗校と異なり、率先して学内のブルジョワ（中産階級）化を目指した新興のラグビー校（学校創立は1567年だが、パブリック・スクールになったのはトマス・ジェームズが校長在任中の18世紀末である）で十四年間もの長期にわたる校長在職を可能ならしめた彼の経営手腕は高く評価されるべきだろう。

ところで「パブリック・スクールを扱った小説の中では校内のチャペルをなつかしく思い出す場面が必ず求められた」というフィリップ・メイソンの指摘があるが<sup>4)</sup>、アーノルドの個性を思えばなおさらのこととして『トム・ブラウン』においては「チャペル」が重要な位置を占める。彼の校長在職は1828年から急死する1842年までの十四年間だったわけだが、校長就任三年目の31年には学校司祭（Chaplain）に指名されている。この事実は、聖（spiritual）と俗（secular）すなわち祭政一致を意味する学校の大きな二つの権力を独占したことになり重要な意味を持つのである。<sup>5)</sup>当時のイギリス国教会の学校社会に及ぼす影響力については、三好信浩氏の『イギリス公教育の歴史的構造』に詳しいのだが、校長と司祭が別人である場合、しばしば経営と理念の対立が避けられなかったことは容易に推察できよう。<sup>6)</sup>その後彼はチャペルでの正式の「説教」を利用して自己の教育理念の拡大を図るべく、新たに毎日曜日の説教を設定したのである。それが今から紹介するヒューズの言うアーノルドの‘the first sermon’「週初めの説教」である。

主人公トムのチャペルでの校長との初めての出会いのシーンは、作者のヒューズが段落の冒頭で仄めかしているとおりスタンリーの『アーノルド伝』を意識して書かれていることは、何よりもその文体のロマンチックな筆致が証明していると言える（第1部7章）。しかしスタンリーの物真似ではない。そのことは後述するとして、まずヒューズの受容の跡を読んでみたい。それは日曜の午後全校「三百名」もの生徒に対する「二十分間に亙る」説教であった。

生徒席の上に独り抜きんでて立っている櫛造りの説教壇、日曜日ごとにそこに立って、キリストの精神に満ち溢れ、その言葉にキリストの権威を体現して、正義と愛と栄光の王たる主キリストの存在を立証し弁明する校長の背の高い堂々たる体軀、燃えるような眼差し、ときにフルートの低い音色のように優しく、ときに軽騎兵のラッパのように鋭利で感動的なその声。（中略）それはまことに高潔莊嚴な一幅の絵であった。とりわけ、堂内の灯火は校長の説教壇と週番監督生の在所のみを照らし、他の生徒席には外から黄昏の柔らかい光がそっと忍び入り、それが次第に濃さを増してオルガンの背後の柱廊の高みの闇に終わっている、といった情景を呈するこの季節くらいに、その趣きの深められるときはなかったのである。

トムが魅了されたのは、一口に言えば校長のカリスマ的な個性と国教会の装置のアンサンブルである。パーク・ホナンが『マシュー・アーノルド伝』（1981）のなかで、ヒューズと同時期の

ラグビー校生として父親の説教を聞いたM.アーノルドの深い感動を伝える母親への手紙を引用して、「演劇的感性の持ち主であれば多分例外なく、アーノルド校長の真<sup>7)</sup>黒なガウン姿と、チャペルでの甲高くて率直な声との素晴らしさを認めることができたであろう。」と述べていることから、上記のトム<sup>7)</sup>の印象は一般的であったと考えられる。ここまではスタンリーとさして変わらない。

もう少し引用を続けよう。「聴いたことの半分も理解できなかった」生徒を感激させた理由は次のように説明される。

この方はこの世における一切の卑劣なもの、女々しいもの、不正なものと、全身全霊を挙げて闘っているのだと悟ったとき、我々はその言葉に耳を傾けたのである。(中略)彼の人生は、彼が偶然に彷徨い込んだ痴れ者や怠け者の天国ではなくて、昔から神が定めた戦場であり、そこでは傍観者は存在せず、どれほど幼い者も彼の味方として馳せ参ぜねばならず、しかもその戦いには生死が賭けられているのだった。

更に、トムにとって校長は「战友」(‘fellow-soldier’)であり、「理想的な指揮官」でもあった。なぜなら、「己の最後の息の根の止まるまで、最後の血の一滴が流れ尽くすまで闘い通さずにはおかない」人物に見えたからである。戦場の縁語の多用はもとよりヒューズの真骨頂であり、スタンリーの物真似でない所以である。

それとどうじに、ヒューズはテンションが上がると聖書の語彙と文体を多用する傾向にあることは、作品全体で言えることだが、上記引用文は説教の域を超えてまるで檄文である。ミッションナリーな興奮が先走りすぎて、逆に読者はここに描出されたアーノルドの実像の真偽の程を疑いたくなるくらいである。たとえば「どれほど幼い者も彼の味方として馳せ参ぜねばならず」といった部分に、当時の産業革命時の強制的な幼児労働、あるいは戦時の外地出兵へのそそのかしに墮しかねない際どさを感じられもするのだ。ただ、このことに関しては、別途論を構えてヒューズの筋肉的キリスト教思想(muscular Christianity)とアスレティシズムの枠組みの中で考量すべきことを確認するに止めておきたい。<sup>8)</sup>

さて、『トム・ブラウン』第2部のテーマは、それまで勉強には身が入らず校則違反を繰り返していたトムの、友人ジョージ・アーサーの影響によるクリスチャンとしての回心とそのことを通じての十全なるアーノルドへの帰依と言える。ただし、トムと「トムの良心の外在である」アーサーとの同室者としての出会いは偶然ではなかった。そこにはアーノルド校長の差配があったのである。トムがその間の経緯を知るのは、随分後の卒業間際になって若い教師から諭されたときである。「校長は、もしも君が面倒を見る友人でも持てば、君ももう少ししっかりして来て、男らしさと思慮深さを具えるようになるだろうとお考えになって、次の学期の初めに新入生のなかで一番優秀な生徒を見つけ出し、君とイーストを引き離し、その少年を君の勉強室に入れたのだよ。それ以来校長がこの実験を至極御満悦の体で見守ってこられたことは、僕も君に保証できるよ。それにしても、君達が校長にどれほど心配をかけてきたか、そして校長が君達の学校生活の一步一步を、どれほど注意深く見守ってこられたことか、君達生徒のうちでそれが分かる者は一人もいないだろう。」そういった個々の生徒への細かな思いやりをも含んだアーノルド校長

の「統治」の結実は、その教師も言うように、「統治者としての博士の力業は壯観の一語に尽きるといふものだ。目下のところ、徹底的に、賢明に、そして強力に支配されている場所と言え、英帝国の隅々を通じておそらくここだけだろう」ということになる。少しも新味のないデウス・エクス・マキーナとしてのアーノルドの役割が表面化するとともに、トムの彼に対する信頼は磐石なものに化すことになる。すなわち、彼は「トマス・カーライルの魂をも満足させたろうと思われるほどの英雄崇拜者になりきっていたのである。」

トムが卒業した翌年の1842年6月トマス・アーノルドは校長在任中に急死する。トムの「太陽は没した」のである。息子の M. アーノルドはスタンリーと相談して父の亡骸をラグビー校のチャペルに埋葬して、「感動的な葬儀」が執り行われたのだが、ヒューズは参列していない。後日、オックスフォードの新生生のトムは偶然新聞で旧師の死を知り、すぐにラグビーを訪ねる、「自分が広い英国中で唯一人の哀悼者であるように思い込んで、自己本位の悲しみに耽りながら。」

作品に則して言えば、以上がヒューズのアーノルド受容の要約であるが、スタンリーの伝記に比べるまでもなく伝記的資料の乏しさは明瞭である。それは既述のように彼の執筆動機から当然の結果だとも言えるのだが、理由はそれだけではない。アーノルドの葬儀に参列しなかったことから分かるように（おそらく声がかからなかったのだろう）、彼はスタンリーや詩人の A. H. クラフのような成績優秀な中枢的存在の生徒ではなく、在校中おしなべて周辺に留まった「並の生徒」(‘an average boy’) でしかなかったのだ。しかし、スタンリー本人も認めているように、『トム・ブラウン』は彼の全く知り知らなかった世界を開示していたのである。両書は相互補完的なものだというのが A. ブリッグズの意見であり、彼は「アーノルドの心の中に起こったことを見たのがスタンリーであったとすれば、大多数の生徒、すなわち、ラグビー校の『大衆』(‘the masses’) を形づくるすべてのトム・ブラウンの心に起こったことを見たのがヒューズであった。」とも述べている。

- 1) 世紀末がアーノルドの名声のピークであり、Strachey の *Eminent Victorians* (1914) を契機に批判的な見直しながされ、それが T. W. Bamford にも継承されているようだ。cf. T. W. Bamford, *The Rise of the Public Schools* (1967), *Thomas Arnold* (1960).
- 2) G. M. Trevelyan, *English Social History*, 1942, Penguin, 1970, pp. 530-534. アーノルド自身、息子のマシューとトマスを1836年にウィンチェスター校に入学させるに際して、母校の実態を知っているだけに多大な躊躇いと懸念を感じていたのである。Norman Wymer, *Dr. Arnold of Rugby*, Robert Hale Limited, 1953, p. 140.
- 3) A. P. Stanley, *op. cit.*, vol. I, p. 31.
- 4) フィリップ・メイソン（金谷展雄訳）『英国の紳士』晶文社、1991、p. 242.
- 5) アーノルドの学校司祭就任は自らの申請によるものであり、校長と司祭の兼務は彼が最初であった。N. Wymer, *op. cit.*, p. 114-5.
- 6) 学校物語の人気作品の一つに、Michael Campbell, *Lord Dismiss Us*, Heinemann, 1967. がある。この作品は同性愛を扱ったものとして有名なのだが、校長と学校司祭が対立したケースを描いて面白い。チャペルの重要性と存在感も十分に納得できる。
- 7) Park Honan, *Matthew Arnold: A Life*, McGraw-Hill, 1981, pp. 40-41.
- 8) 筋肉的キリスト教思想とアスレティシズムには、C. キングズリの講演「健康の科学」に象徴されるように社会ダーウィニズムの裏打ちのあったことは重要である。
- 9) Honan によれば、アーノルド夫人は夫の死後の夏にスタンリーに彼の伝記を委託している。Hon-

an, *op. cit.*, p. 62. Bamford の言を借りれば、『トム・ブラウン』は 'moral tale' であり、詳細な資料にこだわる要はなかったのである。伝記が目的でなかったことは、ヒューズが後日友人への手紙（1895年3月）の中でも認めている。N. Wymer, p. 8.

#### 4 「闘い」のテーマについて

『トム・ブラウン』の大きなテーマの一つが「闘い」であることは明らかである。作品の冒頭から、まるで戦史を繙くように14世紀の百年戦争にまで遡ってかつての大英帝国の戦勝の数々が列挙され、主人公トムのラグビー校生活を記念する到着のその日に、早速彼も駆り出されて行われたフットボールの試合の様子が綿々と語られ、<sup>1)</sup>終章を飾るのが、ローズ・クリケット・グラウンド (Lord's) での対マラランバ試合であったことは、その象徴である。その他生徒間の小競り合いは枚挙に遑がない。

そこでヒューズのいわゆる筋肉的キリスト教思想との関係で、上記の「闘い」のテーマについてもう少し敷衍しておきたい。

「紳士は、いつの時代であれ、武装し、軍人となるに適するように育てられるべきです。」これはジョン・ロックの教育論（1693）にある言葉だが、その後の「紳士を作る工場」たるパブリック・スクールの歴史が、ホブスンや R. H. トーニー等の批判を待つまでもなく、「軍人」に限らず、国の内外で大英帝国を支える人材育成の場であったことも周知の事実であろう。主人公のトムが自分たち生徒を兵士になぞらえ、アーノルド校長に理想的な指揮官を見いだしたとしても、それは伝統的なエトスと、とりわけ当時の戦時色から考えれば至極常識的な想像力だったとも言えるのである。各学寮の集合体である学校を *commonwealth* に譬えたり、あるいはミクロの帝国視することは、多くの校長のスピーチに典型的に見られるように、むしろ常識的な通念でさえあったのである。あの謹厳実直なスタンリーでさえ、「アーノルド校長は帝国を支配したのと正に同じ原理に則ってラグビー校を統治したのである」と述べているのだ。<sup>2)</sup>

1. 優美と叡智, 2. 自分の好きなようにすること, 3. 野蛮人, 俗物, 大衆, 4. ヘブライズムとヘレニズム, 5. されど無くてならぬはただ一つなり, 6. 我々の自由主義実践者。ワード・パズルのパロディめいて甚だ恐縮なのだが、以上の各章のタイトルから書名がお分かりだろうか。正解はもちろんマシュー・アーノルドの『教養と無秩序』（1869）である。産業革命と工業化による中産階級の勃興、すなわち「大衆の反逆」のもたらすヴィクトリア朝中葉期の諸問題のキー・ワードを我々はほぼ満遍なくそこに読み取ることができる。以下参考までにヴィクトリア朝初、中葉期の重要な歴史的事象を復習しておきたい。1832年第1次選挙法改正, 33年東インド会社の通商独占権廃止, 37年チャーチスト運動始まる, 46年穀物法廃止, 自由貿易の開始, 47年婦女子の労働時間を制限する10時間労働法, 48年パリで2月革命, マルクスの『共産党宣言』, J. S. ミルの『経済学原理』, 53~5年クリミア戦争, 54年ロシアに宣戦布告, 57年セポイの反乱, 58年インド統治法により東インド会社解散, 59年ダーウィン『種の起源』, 62年スペンサー『第一原理』, 64年ロンドンで第1インターナショナル設立, 67年第2次選挙法改正, 70年普通教育法。そして時代はいよいよ自由主義に晩鐘を鳴らし、帝国主義戦争の渦中へと加速されて行くこ

とになる、というのが一般的なイギリス史の流れであるが、M. アーノルドの「無秩序」を構成するより細かな事象も列挙しておきたい。十年來のすったもんだの末、漸く46年に穀物法は廃止になったものの工場法は相変わらず制定されず、「飢餓の四十年代」という条件も加味されて民衆の不満は解消にほど遠かった。67年の選挙法改正にしても、直接の要因は全国的な示威の高まりとハイド・パーク騒動であったと言われている。同じ67年にシェフィールドでは、組合法の承認を迫った組合員が工場の機械を破壊するという事件まで起きている。一方アイルランドの独立を期す会員たちは武器弾薬を奪うためにチェスター・キャスルを襲い、逮捕された仲間をマンチェスターの町中で奪い返し、さらにロンドンの刑務所に収監された者を救うために建物の塀を爆破するなど、騒然とした世情は止むことがなかったのである。『教養と無秩序』に「個人的完全は人類全体が我々とともに完成されない限り不可能である」といういかにもアーノルドらしい言葉があるが、彼自身三十年余の視学官生活（1851—86）のなかでヴィクトリア朝中後期の時代の矛盾を、公教育の現場で生々しく眺めていたにちがいない。そして同年齢のヒューズもアーノルドと重なるかたちでその政治的空氣を吸っていたことは言うまでもない。

大状況のことはこれくらいにして、「闘い」のテーマに話を戻そう。『トム・ブラウン』の第2部5章のタイトルは、そのものずばり「闘い」であるが、そこを読むと作者ヒューズの生の声を聞くことができる。

人生に闘いがなかったら一体どうなるか、聞かしてもらいたいものだ。揺籃から墓場に至るまで、正しい意味における闘いとは仕事である、あらゆる人の子の最も高貴で公正な真の仕事である。その名に恥じない人間であれば必ず敵がいる、敵は倒さなければならない、たとえそれが身内の邪悪な考えや習慣であれ、あるいは天上にいる悪の霊やロシア人、辺境地方の無頼漢、一度こっぴどくやっつけておかないことには静かな暮らしをさせてくれないビルやトムやハリリーであってもである。

ヒューズのように人生を闘いの視点で定義することは、とりわけ当時の革命と独立運動の錯綜した、ロシアをも含めたヨーロッパの政治情勢を勘案すれば別段目新しいことではない。目を引くのは、引用文にある聖俗混淆の多様な敵のイメージがいかにもヒューズらしい点である。逆にこれが、「あまりにも情熱的であり、活動的であり、楽観的であった」ヒューズのキリスト教的社会主義者としての政治的面目なのだと言えないこともない。「天上にいる悪の霊」は新約聖書の「エペソ人への手紙（第6章12節）」からの引用であり、「ロシア人」はクリミア戦争の敵国であり、「辺境地方の無頼漢」は第2次ビルマ戦争及びセポイの乱への言及であろう。

さらに、同じ章の末尾では、当時一部で持ち上がっていたアスレティシズム批判に対して反論している。彼は、それらの批判は「偽善的な戯言」にすぎないと切って捨て、そもそも「子供に喧嘩はつきものだ」と言う。それどころか当時パブリック・スクールで盛んになりつつあったクリケットやフットボールは言うまでもなく、「拳闘」の習得をも積極的に勧めているのである。なぜなら「拳闘」は、性格陶冶と背中や脚の「筋肉」(‘muscles’)のためには最高だからだというわけである。そして短い喧嘩論の説教があって、締め括りは「もし闘うのなら、徹底的にやりなさい。立って目が見えてる間は、決して屈伏してはいけない」といった具合である。そこで「闘

い」の一般論から作品の登場人物に目を転じ、当時のヒューズにとってのより具体的でアクチュアルな闘士像を探してみたい。確かにアーノルド校長は彼の理想像ではあったが、いずれにしても「彼処におわします方」であり、より familiar な存在としては、すでに紹介したトム4)の親友のアーサーの父の方が恰好の対象と考えられる。

B. ラッセルは『教育論』において、自分の従兄弟でアーノルド伝を書いた A. P. スタンリー司祭長がアーサーのモデルであると断定している。前者がチェシャー出身で後者のそれがデヴォンシャーであることや両者の年齢差などの食い違いはあるのだが、詮索はまた後日ということにして、トムがアーサーから話を聞くとすぐに「アーサーに負けないくらいに愛慕し尊敬するようになった」父の経歴を紹介しておこう。（第2部2章）

アーサーの父は教区牧師であった。彼が二十五才で妻とともに赴任した中部の町は、ナポレオン戦争後の不景気に喘いでいる最中であった。失業者は路上を彷徨い商店は店を閉じ、学校を下げられた子供たちは遊ぶ元気もないという惨状だった。賃金切下げとストライキの労使の争いが暴動と放火と犯罪に発展すると、地方義勇兵（‘county yeomanry’）の出動になる。そういう状況を「男らしく」（‘like a man’）闘うなかで彼はクリスチャンとしての変容を迫られるわけだが、その内実は次のように描かれている。「信仰と希望と愛」、すなわち「人類の完全性と光栄ある人間性」を信じて出発した彼は、上記の経験によってそれらがいかにユートピア的であったかに気づくのである。そして彼は、今自身が救済に奔走する罪深い下層民と自己の同一化に至るなかで、漸く「真実の、健全なキリスト教的愛」を獲得できたのである。「もちろんこれらのものは時日を要し、脳漿を絞り、胸を傷め、血肉を割いて闘い取らねばならなかった。」、といった念入りなただし書きも、やはりヒューズならではのものであろう。

アーサー夫妻の闘いを描くヒューズの心に階級意識のあったことは明らかである。社会学的に言えば、中流階級出身の彼らが下層民の解放を企てることは、当然のこととして自己の階級を超えねばならないことを意味する。夫妻の‘go native’の志向が孤立をもたらし、かつての仲間恐怖と反感を招く経緯をヒューズは詳細に書いている。町の人々の利害に絡む離合集散のきめ細かいリアリティは、おそらくヒューズ自身のキリスト教社会主義者としての労働運動の経験の反映だと考えられる。

二人は結婚してすぐターリーという町に住むことになる。そこは煤煙の立ち込める、工業地帯の一角にあった。すでに数年前に「上品な家庭の人々」（＝中流階級）に見捨てられたその町は、「チャーティズムと無神論の巢」であり、フランス仕込みの社会主義思想に影響された労働者によって設立された「自由思想クラブ」（‘Committee of a Freethinking club’）もあった。重要なのはそのことではなく、牧師であるアーサーの父が彼らと「懸命に闘いほとんど屈伏させていた」という事実である。その証拠に労使間にトラブルが起きると、「雇主側も雇人側も」彼に相談を持ちかけ事は決着したのである。そして遂には長年の苦労が漸く実り夫妻は「正義の人」だと仰がれるまでになったわけだが、このことは図式的に言えばイギリス国教会の宗教的熱情が大陸の革命思想を凌駕したことを意味し、正に牧師は本懐を遂げたことになる。この夫妻の子供がアーサーであり、トム4)の回心の導き役になることはすでに述べたとおりである。ここにヒューズの保守性の一面を指摘することができる。

1) 第1部5章におけるフットボール試合の詳細な実況描写が、後にラグビー・フットボール史の重要

な資料になる運命にあったことは、歴史的皮肉としか言いようがない。F.R. マグーン（忍足欣四郎訳）『フットボールの社会史』（岩波新書）、エリク・ダニング、ケネス・シャド（大西鉄之祐・大沼賢治訳）『ラグビーとイギリス人』（ベースボール・マガジン社）参照。

- 2) Stanley, *op. cit.*, Vol. I, p. 87.
- 3) ヒューズ自身の拳闘の腕前は相当なものであったようだ。キリスト教社会主義運動の中心人物であったF.D. モリスの演説会場で、たとえば次のようなこともあった。聴衆から野次が起こるとヒューズは「ぱっと椅子の上に立ち上がり、女王を侮辱する者は、だれであろうと、自分が相手になってやるぞと公言し、ピアニストにもっと大きな音で弾くように注文して、斉唱を終わりまでつづけさせた。」ヒューズの active の一面であろう。堀経夫・大前朗郎監訳、『イギリス社会思想家伝』ミネルヴァ書房、1978, p. 213.
- 4) Bertrand Russell, *On Education*, 1926, Routledge, 1994, p. 26.

## 5 『トム・ブラウン』の政治性

以上の解説からも、この作品が『教養と無秩序』と同質の政治性を孕んでいることが察せられると思う。ヒューズはどちらかと言えばアーノルド校長を聖人視することに熱心で、彼の現実的な学校の経営能力、あるいは休暇中の Fox How での家庭生活などについては口を鎖している風であるが、自分の憂国の私情は全編遺憾なく吐露している。『トム・ブラウン』はこれまでややもすれば子供向きの学校物語という先入観によって狭隘化されて論じられてきた嫌いがあるのだが、編者のサンダーズも指摘するように実は「極めて政治的な」(‘deeply political’) 書物なのである。特に、トムがラグビー校に入学するまでの彼の生い立ちを描いた第1部の1章から3章についてはその感が深い。かつてトレヴェリアンはデフォアの著作を歴史家にとっての宝庫だと言ったが、ヒューズの描写も過剰な主観性を差し引けば歴史的資料として非常に興味深く、コベットやゴールドスミス等のレポートに匹敵する価値を持つのではあるまいか。

おう、英国の青年よ、若き英国よ。大博覧会その他の途方もなく大きな催し物が毎年開かれる、鉄道競争時代に生まれ合わせた諸君よ。諸君は三ポンド十シリングで、五週間の休暇を利用して二千マイルもの土地を旅することができる。しかし、なぜ諸君は、自分の生まれ故郷をもっとよく知らないのか。諸君は皆、夏の休みか長い休暇か何かで課業から解放された途端に、地球の果てまで飛び出して行ってしまうようだ。たとえば、往復切符で二週間かけてアイルランド一周をするとか、スイスの山にテニスの詩集を忘れてくるとか、オックスフォード大学の競艇用ボートでダニューブ川を漕ぎ下るとかいった具合に。その後静かな二週間を送るために家に帰ると、すっかり意気消沈して父祖伝来の庭園に仰向けに寝そべり、ミュディー巡回文庫の最新刊の書物に囲まれて死ぬほど退屈するという次第。そう、なるほどそれには結構な一面もある。諸君は少しはフランス語が喋れるし、多分ドイツ語も喋れるだろう。旅先で色々な人や都市を見たに違いない。絵の流派や高等芸術その他についてそこそこの見識もお持ちだろう。(中略)ただ、私の言いたいことは、諸君は自分の郷里の小路や林や野原のことを知らないということだ。諸君の頭には科学が一杯詰まっているかもしれ

ないが、誰一人として隣の林や三マイル向こうの丘に生えているかたばみや蜂状蘭の在り処は知らないというわけだ。（第1部1章）

もう一つ、故郷のパークシャーの村での「祭り」(‘veast’)の衰退に対する彼の感想（第1部2章）を引用しておきたい。幼少時の祭りの盛んな様子を縷々語った後で、自分は二十年ほど顔を出していないのだが、「聞くところによれば、祭りはすっかり変わって昔の良さがなくなったそうだ」と嘆く。理由は「良家の人々や農場主が関心をなくして参加しなくなったからだ」と彼は言う。

一体これは良い兆候でしょうか、それとも悪い兆候でしょうか。私には分かりません。それが二十年にわたる営利主義とそれに伴う過重労働との結果として、階級間の疎隔がさらに甚だしくなったために他ならないとすれば、あるいは、我々の息子や娘たちがロンドンのクラブ生活や所謂社交界に憂き身をやつして、昔からの英国風の家庭の勤めを怠るようになったため、あるいは農場主の息子たちが紳士の真似をし、娘たちが美味しい英国風のチーズを作るよりもつまらぬ外国音楽の演奏の方に熱を入れるようになったためだとすれば、たしかに悪い兆候でしょう。また、古い「祭り」の時代はもう過ぎ去ったのだ、それは最早田園の健康で正当な行楽の表現ではなくなったのだ、そして我々は国民全体としてそういうものはすでに卒業して今は過渡期にあり、だからこそそれに代わるより良いものを探しているのであって、そして幸いにもすぐに見つかりそうだとするのであれば、おそらく結構な兆候なのでしょう。

「結構な兆候」などであれば、そもそも彼の「説教」はなかつたらうし、「悪い兆候」として唾棄していることは明らかである。因みに前段については、『トム・ブラウン』が出版された1857年にテニソンの新版の詩集（かの有名なラファエル前派の画家たちの描いた挿絵入りのモクソン版）が出、やはり同年に登山熱が高じて例のアルペン・クラブ（英国山岳会）が結成された事実をつけ加えておきたい。引用文の特徴は、あれかこれか式の論理の単純さとくどいほどの具体的事象の積み重ねである。いかにも自恃の心に溢れた家父長的農村地主に相応しい文体、といった印象である。

ヒューズが問題視しているのは当時一段と鮮明になった都市（民主的イングランド）と農村（貴族的イングランド）における社会生活の分化と価値体系の転倒の現実であった。これはR.ウィリアムズが『田舎と都会』で丹念に追跡した課題であるが、何もイギリス特有のものというわけではなく近代化に伴う普遍の問題であることは周知の歴史的事実である。ハイド・パークの水晶宮で有名な「博覧会」、「鉄道」、「旅行」、「ドイツ語とフランス語」、「科学」、「紳士」等々が都会を代表し、田舎の象徴が彼の愛惜して止まない「祭り」と自然である。ただ、悪徳の都会と無垢の田舎という安易な図式化を免れていることはヒューズのために言っておきたい。彼の伝記や『オックスフォードのトム・ブラウン』（1861）等の彼の他の作品を読めば、彼が保守反動でなかったことは明らかである。むしろ一方では選挙法改正を支持し、ガルバルディーやマッシーニへの同情が示しているように大陸の革命気運を理解し民衆への権力移行を認めるほどの democrat

だったのである。要は、いかにそれが不可避の時代の変遷とはいえ、闇雲な田舎の伝統破壊と急激な都市化による人間性の変貌に対し、ワーズワースの強い影響下にあった彼にしてみれば情動的に我慢ならなかったというところだろう。

ただし、後段の引用の冒頭でも紹介したように、作者はここ二十年故郷の「祭り」に顔を出していないので、その実情は「聞くところによれば」という正直な留保付きのものになっている。彼はベリオル奨学金が取れるほど優秀ではなかったにしても、すでにオックスフォードで「科学」と外国語を取得し、その後長らく都会に住む紛れもない故郷喪失者である。上記の論理を当てはめれば、「祭り」の衰退の一因が彼自身にあること、「祭り」の衰退がそのまま田舎のそれであること、今や無垢なる田舎は神話にすぎないこと、そして息子のトムが村を離れて学校という都会に行くことが益々田舎の凋落を加速させるであろうこと、それらについて彼は言及しない。ウィリアムズの言葉を借りて言えば、これは「田舎の生活様式へのロマンチックな愛着と見せて、その実人々を道具としてしか見ない田舎からの離脱」である、と言われても仕方のない姿勢ではないか。<sup>1)</sup>

さらに、「営利主義による階級間の疎隔」というヒューズの指摘は、都市における産業化の進行による労使間の所得格差の拡大に加えて、階級間移動(=階級の混交)の現実をも視野に入れての言葉だったと思われる。これは「ヴィクトリア朝中期の妥協」と呼ばれる、一部地主階級の部分的ブルジョア化と一部ブルジョア階級の部分的貴族化という、階級の相互乗り入れを意味した。この社会現象は、すでに19世紀初頭からパブリック・スクールやオックスブリッジ等において、所謂学校のブルジョア化として進行していたのであるから、特に新興のラグビー校ではアーノルドが率先してその方向性を押し進めたことから、ヒューズは上記の階級間摩擦をすでに学生時代に経験していたに違いないのである。彼はこれを「悪い兆候」と捉え、その政治的であるべき補正案のモデルに再度「田舎」のモラルを提示している。トムの父(=郷土ブラウン)は「息子が貴族の息子と遊ぼうが、百姓の子と遊ぼうが、相手が勇敢で正直なら一向に差し支えないと考えていた。」なぜなら、自分も「父も祖父も」そうしてきたし、「労働者(workerではなく'labourer')とフットボールをやったり、鳥の巣探しに出かけたりした」からだ、だから「トムが村の子供たちと遊ぶのを奨励したのだ」ということになる。モラルはさておき、村に「二十年」も帰っていないヒューズに故郷の労働者との鳥の巣探しは残念ながら無理である。さらに、1846年の穀物条例廃止以降、村にはかつてのように労働者は居なかったはずである。<sup>2)</sup> 作者は自らブラウン一族を指して「ドンキホーテ型」と規定しているのだが、少なくとも政治的には言いえて妙だと思われる。

1) Raymond Williams, *The Country and The City*, 1973, Oxford University Press, 1975, p. 203.

2) 『トム・ブラウン』における「穀物条例」(Corn-Laws)への言及は第2部9章冒頭での一箇所だけである。“What a bother they are making about these wretched Corn-Laws!” 大学生になったトムの発言にしては、いささか理解に苦しむ内容ではある。ついでに言えば、クリミア戦争への言及もただ一箇所あるだけである。p. 343.

## 6 ヒューズとスタンリーが言及しなかったこと

T. アーノルド理解のためには、『トム・ブラウン』とスタンリーの『アーノルド伝』とを相互補完的に読むべきだとする A. ブリッグズの指摘は、すでに紹介したわけだが、両者が言及しなかった部分を少し補足しておきたい<sup>1)</sup>。

ところで、現在の洗練されたイメージからは想像できないかもしれないが、アーノルドの改革以前のパブリック・スクールの荒れ様は凄まじかったようだ。詳細は最近益々発掘されつつある子供の社会史に譲るが、一例として19世紀初頭の生徒の反乱状況を見るだけでもそれは分かるだろう。主なものを列挙すれば、1808年にはチャーターハウス、ハロー、ウィンチェスター、10年イートン、18年イートン、シュルースベリ、ウィンチェスター、20年ラグビー、22年ラグビー、28年ウィンチェスター、32年イートン、といった具合であった<sup>2)</sup>。抜粋でこれだけ軒並みなのだから、他は推して知るべしであろう。正に「風土病」という形容が相応しい社会現象であった。「大砲を数門装備した二個中隊もの軍隊の出動」ともなれば、これは政治問題とも言える<sup>3)</sup>。では、生徒はなぜ反乱を起こしたのか、なぜ起こしえたのか。一言で言えば、力関係の逆転ということである。従来からも、パブリック・スクール是非論は邸内家庭教師制度と比較されて論じられていたわけだが<sup>4)</sup>、諸般の事情から18世紀になると貴族、地主階級の子弟が大挙して入学するようになった。となれば、それまでの下層民の給費生に対するラテン、ギリシャ語の古典の伝授を内容とする教育組織の生態系は壊れ、変革の要請が持ち上がったわけである。先ず、富と権力の持ち主である保護者とそれを笠に着た生徒を迎えて、校長の権威が落ちた。金も出すが口も出す、かのマシュー・アーノルドが指弾する「俗物」(‘philistine’)を前にして、もはや校長は「有給の使用人」にすぎなかった。たとえば、1768年のイートン校の反乱は、校長の不良生徒処分に端を発して起こった。級長 (prefect) たちは、下級生の指導権の占有を主張して校長に抗議し、遂には辞職にまで追い込んだのである。事態の裏に保護者の支持のあったことは、もちろん言うまでもない。それ以前から、校長の父親が商人という理由で、彼は貴族出身の生徒たちに軽蔑されていたのである。そのことが重要である。

1797年のラグビー校での反乱はさらに凄まじい。校長が寮内でピストルの音を聞きつけ、犯人の生徒を捕らえて入手先を問いただすと、近くの小売商人とのこと(生徒による階級差別の一例)。商人が否定して、その生徒は当然鞭打ちの処分を受ける。その後生徒たちは報復として商店の窓ガラスを割る。校長が連帯責任を要求して損傷の弁償を命じると、これを逆恨みした生徒たちは今度は爆薬を使って校長の部屋を破壊し、さらにはベンチ、机、羽目板を積んで火をつけ、校長の蔵書を投げ入れて焼くという、まるでホガースの版画を彷彿とさせる乱暴狼藉。たまたま当地に駐屯していた兵士の手を借りて事は治まったものの、何とも物騒な話ではある<sup>5)</sup>。

その後、一つの妥協策として二元管理制度が定着し始めた。二元管理の実情を簡単に言えば、教室管理以外の、プリーフェクト・ファギング制度を含めたフットボール等の課外活動のすべてを生徒の管理に委ねたのである。教師側が身を引いた線での妥協であることは明らかである。

同じラグビー校で1820年と22年に生徒の反乱が繰り返されたことは前述のとおりである。トム

の入学の別れに際して、父親が「学校が昔のままだとすれば、多くの悪辣極まることがはびこり、聞かせたくないような言葉を耳にするだろう」と助言しているのだが、作者のヒューズが差し控えた上記のラグビー校のリアリズムを踏まえておかないと、アーノルド校長の経営手腕の現実性を把握できないことになる。

ラグビー時代のアーノルドは聖人でもなければ、熱血教師でもなかった。急死するまでの十四年間、あるときは一票差で理事会の支持を取りつけるという危機を凌ぎながらその地位を守り、結局は王室の訪問（1839）という栄誉を招くまでにラグビー校を隆盛に導いた「校長」（= *governer*）だったのである。手腕がなければ、この実績はなかったはずである。彼の端倪すべからざる辣腕の一端を象徴する事例を紹介しておきたい。1839年のサザランド公爵夫人からの息子の入学許可の要請に対し、妻を通じて彼は次のように回答している。「夫はきわめて熱心に入学しないように勧め、むしろイートンに行くべきですと忠告しておりました。イートンなら令息は同じ階級の出の生徒達に会えるでしょうが、ここでは生徒の大多数を占めている多少財産のある紳士の子息達とは全く違う階級の出と見なされるのは確かですから<sup>6)</sup>」。アーノルドが貴族の子弟を締め出そうとしたのは、過去の反乱に学んで管理の能率を図ったためだけではない。それは、当時の福音主義の流行に棹さすというより、友人のカーライルと共有した貴族階級の政治的怠慢に対する強い反発が根源にあったからである。

他方では、生徒の性的欲望の望ましい解消にも気を配り、「食養生、緩下剤の投与、身体鍛練、そして自己抑制」こそ性的欲望の最適治療法だと主張する、当時の有名な医師ウィリアム・アクトンの助言を仰ぐことも怠らなかった<sup>7)</sup>のである。要するに、生徒、保護者、理事会、国教会、ひいては議会等への細かな配慮なしには、言われるところのカリスマ的個性だけではラグビー校の校長職を全うすることは不可能だったのである。先のヒューズのように幻想としての「田舎」= *pastoral* に引きこもる方法とは異なる、これは少なくとも一つの積極的な政治的实践であったと認められる。

- 1) スタンリーの伝記は「伝記というより賛辞である」、という N. マイヤーの指摘を待つまでもなく、伝記として未熟である。師弟関係にあったことや執筆事情などを考えればやむを得なかったとも言えるが、「賛辞」の独り歩きがアーノルド神話の原因の一つであったことは否めない事実であろう。J. G. Hardy. *op. cit.*, p. 86.
- 2) エリク・ダニング、ケネス・シャド、前掲書、p. 63. これはスポーツ社会学としては極めて良質の著書である。この項の執筆に大いに参考になった。
- 3) 北本正章『子ども観の社会史』、新曜社、1993、p. 104.
- 4) 三好信浩、前掲書、pp. 6-7. 参照。
- 5) 生徒のピストル所持について言えば、アーノルド校長になってからもピストルの横行はあったのである。トムの言によれば、親友のイーストは六年級になった自覚を自他ともに示すため、所持していたピストルを手放した（'gave away his pistols'）のである。p. 362.
- 6) エリク・ダニング、前掲書、p. 90.
- 7) ローレンス・ストーン（北本正章訳）『家族・性・結婚の社会史』、pp. 315-6.

## む す び

パブリック・スクールを舞台にした学校物語の重要なテーマの一つが、卒業後の生徒の進路問題である。現実はさておき、作品のなかで設定される選択肢は、通常、大学と軍隊の二つである。『トム・ブラウン』では、イーストが軍隊に入ってインドへ行ってしまふ。それに対してトムは引け目を感じ、大学進学を放棄する衝動に駆られるが、教師の説得で踏みとどまる。ヒューズはあれほど闘いを宣伝しておきながら、なぜ主人公のトムを学校に留め置いたのであろうか。筋肉的キリスト教思想から帝国主義へと収斂していく19世紀後半の思潮に照らしても、これは一種の退化であるように見える。しかし、果してそうか。*Scouring of the White Horse* (1859) と *Alfred the Great* (1869) の二つの作品は、ヒューズの故郷バークシャー（＝田舎）への回帰を益々鮮明にしたものだが、これも都会化の大勢から判断して退化ということになるのか。

実はこの問題は、A.ブリッグズが代表的ヴィクトリア朝人の一人として、トマス・ヒューズを特筆した思想的理由とも関わって、特に筋肉的キリスト教思想一般ではなくヒューズのその内実を考えるうえで、非常に重要な要素なのだが、紙数の関係上、追究は後日を期したい。